

お陰で、五人の子供はみんな大学まで行かせることができました。

それからのこと、五十四歳で盲腸炎をこじらせて破裂するような大病を患い、五十六歳で子宮ガンになり、五十八歳のときに交通事故に遭いました。そのときは、二十四時間意識不明で、足は複雑骨折の重傷でした。そんな災難が続きましたが、そのつど御先祖様のお助けと、周囲の人々のお力を得て助けられ、今日になりました。生きていますというよりか、生かされているという方が適しているかもしれない私の人生です。本当に不思議な思いです。

すべて感謝の気持ちでいっぱいです。主人は、平成三（一九九一）年八月に天国に旅立ちましたが、私は九十歳になった今も元気で、毎日を楽しく暮らしています。

敗戦体験記

岡山県 武田信昭

一 八月十五日のこと

昭和二十（一九四五）年八月十五日。その日の旅順は朝から耐えがたい暑さの中にあつた。枢軸国のドイツ、イタリアは既に連合国に降伏していたし、沖繩も米軍の手に落ち、日本には重苦しい雰囲気が漂っていた。

私はその年の四月、官立旅順高校へ入学したものの、入学と同時に旅順郊外の三間堡にできる新しい海軍飛行場建設のために動員され、兵舎のような所で寝泊りして、モッコを担いでの滑走路建設に当たっていた。戦況は、それほどまでに緊迫していたのである。

夏休みに入る七月末に、滑走路の完成を待たず、やっと学寮である向陽寮に戻り授業が始まった。

突如襲ってきたソ連軍の怒涛の南下に、頼りに

していた関東軍は壊滅状態となり、この八月十五日の午後、我々は再びペンを捨て、急遽旅順海軍部隊に入隊することになった。私も玉砕の運命がひしひしと迫ってくるのを感じた。

学寮の食堂で最後の昼飯の後、太鼓の音に合わせた寮歌練習のまさにそのとき、玉音放送による敗戦のニュースが飛び込んできた。「デマだ！」

「敵の謀略にのるな！」などと叫ぶ寮生の声で、寮歌練習どころではなくなつた。喧噪の中に、我々は劇的に今次大戦の敗北を知つたのである。部隊への入隊は当然に中止され、取るものもとりあえず、在学証明書だけを手にして、それぞれ帰省した。私はその日の夕刻、列車に飛び乗り帰省先の大連へと急いだ。思えば、終戦が二、三日遅れていれば、私の運命はどうなつていたか分からない。ともかく、火炎瓶もろともソ連軍戦車に体当たりする行動はなくなり、運命は百八十度転換したのである。

二 家族の状況

私の家は、大連市の郊外、風光明媚な海水浴場の「星ヶ浦」の西、黒石礁終点から徒歩の距離にある、ドングリ山の中腹にあつた。日本人住宅が五、六十軒ばかり群がった団地で、町名を有明町といった。私の家はその団地の中央にあつて、窓からの眺めは美しく、青い渤海、アカシア並木の旅大道路も眺められた。

家族は四人で、満鉄保養院の薬剤師をしていた父は、この四月から北満の新站病院に単身赴任して留守。母は専業主婦であり、姉は満鉄中央試験場へ就職していた。私が旅順の学校へ行くことになり、母は家が女ばかりになり不安だと言つて、私の後輩に当たる大連一中四年生の山下君を下宿させていた。私はそこに帰省したのである。

国敗れては、一瞬にして公的機関は麻痺、紙幣は一夜にして紙くずとなる。父は音信不通となつていた。異民族の真つただ中、今後どうなるのか？ どうすればいいのか、考えるだけ野暮だった。ともかく長男として、父が帰るまでの留守宅をがっ

ちり守らなければならぬ責任が生じたそんな状況の中で、山下君の存在は大きかった。これまで「神州は不滅」を堅く信じていたので、敗戦ということはあまりにも青天の霹靂であった。食糧の備蓄などあるはずがない。

近所の人と同様に、私も家の前にゴザを敷いて家財道具を売りさばくことにした。父が永年勤続でもらった記念の銀杯、これも父が大切にしていた象牙のマージャン牌、など……。初めての商売でそのうえに品物にも限りがあったので、この商売は数日しかもたなかった。

三 自警団の活躍

敗戦が事実となって、最大の不安、恐怖は現地人たちの復讐、襲撃だった。何しろ、今まで日本人は、支配者として無意識に彼等を蔑視し、搾取してきた。敗戦により立場が逆転したからには、何をされるか分からない。日本人部落の、ここ有明町にも早速自警団が結成された。自警団の本部は、部落の中央で、私の家の向かいに設けられた。

山下君、そして私は若者として駆り出された。

連日、昼夜を分かたず、団地を端から端まで巡回した。団地の周辺部の家々は、現地人の襲撃を恐れて、どんどん町の方へ避難するために引越していった。そのため、団地は周辺部から空き家がどんどん増えていき、現地人はその空き家をめがけて襲ってくるのである。一度襲われると、それこそ家具一切はもろんのこと、畳、ふすま、ドア、ガラス窓まで剥いでいく。ちようど大発生したネズミの大群が通り過ぎた跡のように、綺麗さっぱり何も残らず、瞬時にその家は廃墟となる。自警団は、大声をあげ窃盗団を追い払うだけだった。

治安の悪化に音をあげた自警団は、警察に助けを求めた。当時、既に警察は機能麻痺の状態ではなかったかと思うのだが。再三の要請に、やっと日本人の警察官が一人、状況視察に有明町に派遣されてきた。私が先頭になって、部落の惨状を案内していたときのことである。突如、高梁畑コウリヤシから

赤い房のついた中国式の槍が、警察官の腰を一撃した。その警察官は、手で腰を押さえてしやがみ込んでしまった。「ガサガサ」、「ガサガサ」と高粱畑を逃げる現地人の群れを見た。尊い命は絶たれた。

目前での殺人に敗戦の現実を知らされ、腰が抜ける思いだった。

この衝撃的事件の前後については記憶にないが、空き家を狙う窃盗団から恐怖の復讐を受けたことがある。私は木刀を握り、みんなに目で合図をした。山下君は木銃を取って、自警団の学生某君と三人で自警団の控室を飛び出した。思い思いに盗品を担いで逃げて行く現地人を追いかけ、盗品を取り戻そうとしたが、深追いしたのがあだとなり、彼らから手痛い復讐を受けることになってしまった。追っ手が学生三人と見てとつたのか、急に大勢の加勢を得たのか、向きを変え私たちに襲いかかってきたのである。我々三人は意表を突かれ、必死で逃げた。後ろから無数のこぶし大の石が飛

んでくる。どんなに一生懸命に走っても、悲しいかな私が一番コンパスが短いので、捕まるのは私からだった。でもなぜか石は私を通り越して、私の前を逃げて行く二人に飛んでいった。

坂を下って追いかけたのだから、逃げ道は上り坂である。これでは逃げおおせない。とつきの判断で横道に入った。突き当たりに、一軒の洋館がポツンと建っていた。そこは日ごろから人気のない不思議な家だった。もし、そこが中国人か現地人の家であつたら、まさに「飛んで火に入る夏の虫」である。運を天に任せるとはこのことだった。

幸い、そこは関東軍の特務機関のアジトだった。軍服を脱ぎ、変装した日本軍の人が三人いた。私たちは幸運にも命拾いをした。逆襲してきた窃盗団は、この家を十重二十重に取り巻き、盛んに投石する。窓ガラスが音を立てて何枚も割れていた。三人の軍人のうち、一人はかなり偉い将校のようで、あとの二人は下士官らしく無口だった。

将校は「そのうち退散するさ！」と動じなかつ

だが、窃盗団のあまりにもしつこく、一向にあきらめない攻撃に、将校は全員を二階の一室に集めた。「様子がおかしい。中へ入って来るかもしれない。軍用犬を放せ！ 全員家の守りにつけ！」と指示し、さらに「武器はスコップしかない。しかたがないが、これで敵の頭をブチ割れ！ 振り回しては駄目だ！」とも言った。

我々三人は下士官に連れられ、それぞれ示された守りの部署についた。私には、一人で裏口の守りがあてがわれた。下士官は、「孔明の空城の計」(敵の大軍に叶わぬとみた軍師、諸葛孔明は、わざと城門を開け放ち、うちから音楽を流して、敵を城内に誘った。意表を突かれた敵将は、これは天才的戦術家の策略と思ひ込み、城内に攻め入ることなく立ち去ったという故事)を真似たのか、意外にも「さあどうぞ」といわんばかりに勝手口のドアを開け放した。私はちやうど西部劇に出てくる保安官のように、開け放たれたドアの影に隠れ、ピストルならぬスコップを振り上げたまま、

敵の侵入を今か今かと待ち構えた。もし、一歩でも中へ入って来ようものなら、スコップが振り下ろされて頭蓋骨が碎かれるであろう。最初の一人をうまく殺せば、もう入って来ないのが現地人の習性だという。本当だろうか？ 私は信じなかったが、今は下士官の命令に背くことはできない。

言われるがままにスコップを振り上げ、勝手口の守りについた。ドアは開け放され、歩き回っている敵の足がすぐの所に見える。何人も何人もわめきながら歩き回っている。シェパードは激しく吠えまくる。勝手口の広い部屋には私一人、回りにはだれも見えない。膝頭がガタガタ震えて止まらない。生きた心地のしない、生涯最大の恐怖を経験した。

どれだけの時間が経過したのであろうか？ それは長かった。「孔明の空城の計」が功を奏したのか、敵は侵入することもなく、日暮れと共に外の喧嘩は次第におさまってきた。将校は全員を集め、「よくやった！ もう大丈夫だ。でも今帰るのは

危険だから、日暮れまでここで待って、闇の中を帰れ！」と言われたが、とつぷりと日が暮れるのを待ちきれず、我々はその洋館を後にした。高粱畑では、夏の虫が、だれも潜んでいない安全な道を教えるかのように鳴いていた……。

このことは、百人を超す群衆に取り囲まれながらも、命拾いした事件として、終生忘れることができない。

四 ソ連軍の侵入

こうした恐怖がほぼ一週間続いた後、けたたましく地響きを立てて、旅大道路を西に向かって走る戦車の列があった。これこそ、八月九日以来南下してきたソ連軍の戦車部隊と戦闘部隊であった。「栄枯盛衰は世の習い」と言うが、日露戦争の硝煙が消えて四十年、今ここにかつての対戦国であるソ連からの復讐を受けようとは、今日まで思いもよらないことであつたが、現実には遂に来るべきものがきた。これは歴史の必然かと、複雑な思いと限りない不安で頭は混乱してしまつた。

女性はみんな男装をして身を隠した。母も姉も、取りあえず天井裏に隠れた。天井裏に食事を運ぶ毎日が続いた。瞬時にして、有明町には女性は一人もいなくなつた。

三度三度の食事の支度、それに洗濯、掃除はすべて男たちの仕事になつた。電気冷蔵庫、洗濯機、炊飯器などない時代である。ものが腐りやすい真夏のことでもある。何をどうしたか具体的には覚えていないが、山下君と二人、夢中で家事をこなしていたことは事実である。

昼夜を問わず、深夜でもソ連兵は襲つて来る。空き家をめぐけて来る現地人と違い、人が住んでいる家を襲うのである。ソ連軍第一線戦闘部隊の兵隊は、人相もさることながら粗暴で荒々しく殺気立っていた。さすがに現地人の来襲はソ連兵に遠慮したのか、すっかり鳴りを潜めていた。

「ドン！ ドン！ ドドン！」とけたたましくドアをたたく。開けなければ破られる。戸を開けると、いきなり天井に向けて自動小銃を乱射する。

天井裏には母と姉がいる。肝を潰した私の胸に銃口を突きつけ、盛んに「ダワイ！ ダワイ！」を連発する。腕時計を出せというのである。それも、連日連夜のことである。家にそんなに腕時計があるわけがない。言葉が通じないだけに困った。でも、自動小銃は威嚇に過ぎないと思うと、恐怖感には不思議と湧かなかった。始末に負えないのは「女を出せ！」と迫ることである。何しろしつこい。あるときには我々自警団全員を岩陰に並べ、女を出さねば銃殺だと銃を構えられたこともあった。しかしこれも威嚇と見抜いて、だれも口を割らなかった。国敗れ、無政府状態の混乱が続いていた。

五 治安の回復

どんなときでも、混乱はいつまでも続くものではない。必ず治まるものである。

敗戦から三週間も過ぎて、赤字に白で「KP」と書いた腕章を腕にしたソ連軍の憲兵（我々はカーペーと呼んでいた）が派遣されてくるようになる。さすがに傍若無人なソ連兵の行為は嘘のよ

うにビタリと止んだ。さらに幸せなことに、そのKPの本部が我が家の隣の空き家に設けられたのである。今まで隠れていた女性群も、続々と現れてきた。現地人の略奪もなくなり、有明町に平静さが戻ってきた。

治安は一応治まったものの、敗戦国民としての厳しい生活が待っていた。その日その日の糧を得るため、ソ連兵相手に売店を開く者、洗濯屋を始める者、ウオツカをリュックサックに詰めてソ連兵の家庭を行商して歩く者などなど。いろいろと仕事を始めた。人々はそれぞれの生活に必死だった。しかし苦しまぎれの初めての経験であり仕事だったので、いずれも長続きはしなかった。

私もあらゆる経験をした。ときには、街へ出て立ち売りもやってみた。花嫁衣裳にと買い集めていた姉の着物を、両手に提げて市場の街角に立つと、すぐに現地人が寄って来て値踏みをする。一人が手にとって値段を付ける、次の一人が別の着物を手にして値段の交渉に入る、まとまらないの

にまた別の一人が、ということを繰り返しているうちに、いつの間にか最初の客は着物とともに姿を消してしまった。あつという間に、数枚の着物が雑踏の中に消える。みんなグルなのである。それでも二、三の着物を金に換え、朝鮮米を買って帰る。初めての商売、いずれもままならなかった。

六 父帰る

そんな生活が続いていたころ、北満の新站到身赴任していて音信不通だった父が、ひよっこり帰って来た。

当時、北満ではソ連軍に蹴散らされた関東軍と、南に向かつて逃避行をしていた一般居留民とで大混乱をきたしていた。無惨な死を遂げた無数の邦人もいたというのに、よくぞ命があったものである。

これは後日談であるが、私の従兄弟、得光主計中尉が命からなら南方に避難行の途中、たまたま父のいる新站病院にたどり着いた。「武田先生いますか？」と父の安否を尋ねると、応対した現地

人の病院職員は「今、川へ行っています」と言ったので中尉が急いで川へ行くと、父はのんびり釣り糸を垂れていた。「叔父さん！ ソ連兵がすぐそこまで来ているよ！」「そうか、そろそろ逃げるとするか」と、おもむろに釣り糸を片付けたという。その一瞬一瞬が生死を分けるというのに、気の抜けた話ではある。今、運命は確かに神の所管事項ではある。

二、三カ月間、私は長男として父の留守を守ったのである。未曾有の混乱の中、あるときは町への避難を考え、満鉄独身寮（望洋寮）の一室を確保し、危険なときは母、姉を一時そこへかくまったこともあった。布団袋を直して大きなリュックサックを作り、家財道具をそれに詰めて、幾度となくその避難所まで通ったこともあった。

予想の立たない状況の下で、その日、その日の生活に夢中だった。敗戦国民の外地での生活は大変だった。

七 引揚げまでの生活

前に書いたように、敗戦によって有明町の日本人は、現地人の略奪行為に恐れ、部落の周辺部から次々に町の中心部に集まって来た。家の窓から旅大道路を大連市内に向かって移動する避難民の荷物を積んだ馬車の列を、何度も見た。しかし、その馬車がある所まで来ると、きまって現地人の群衆に取り囲まれて、荷物はすべて略奪されてしまう。昼間の堂々とした追い剥ぎである。分かっているけれども、馬車の列は引き返すこともなく続々と続いていた。自分の荷物だけは例外、安全だと思ってしまうのだろうか？ 戦争はすべての人を異常にする。

幸い私の家は部落の中心部にあつたので、急いで避難することもなかった。そのうちに、ソ連軍の憲兵に当たるKPの本部が隣の家に設けられたので、これほど安全な場所はなかったからである。一度避難所まで苦心して運び終えた家財道具を、再び有明町の家まで持ち帰ったりした。すべてが成り行きまかせの行動だった。

隣家のKP隊長は、穏和でなぜか親日派のようで、私たち家族にはとても親切だった。空き家には、家族持ちのソ連軍将校が住み、出入りは激しいものの、いつの間にか子供の遊び声もする、のどかなソ連軍の住宅街に変貌したのである。

私は町中へ出て、先輩、後輩といろいろな商売を模索した。中でも、闇市で開いた古本屋が一番長続きした。貸本屋も手がけると、店は繁盛した。戦争で、人々は活字に飢えていたかのように、市場で買いた物のついでに小説を借りて帰る人が多かった。全く希望のない日々ではあったが、私はこうしてその日の家計を助けた。北満から必死の思いで逃避行をされた方々に比べれば、とても恵まれた生活だった。

敗戦二度目の冬は、寒さが厳しかった。暖をとるため、四畳半一間と六畳一間だけを残り、一部屋、一部屋と壊して薪にした。四畳半に小型のストーブを置き、煮炊き、湯沸かし一切を賄った。

寝室は隣の六畳。夜中に寒暖計を見て驚いた。室

内が零下二十度を指していたのである。寝るには工夫がいる。裸になって寝間着に着替えると、氷のような布団に潜り込む。まずは布団の中で全力疾走する。でなければ凍りつく。そして、頭から手ぬぐいを被って一気に眠りに就くのである。タオルに色がなければ、葬式前の仏のようである。

遂に、この有明町では、日本人家族は私たちがけになってしまった。ソ連人はもともと人なつこい。それに純朴である。いつの間にか近所付き合いもするようになっていった。わずかな間に急激な変化であった。

そんな状況下、昭和二十二年三月、ここにも日本への引揚げの知らせが届くようになった。

八 単身の引揚げ

大連港からの引揚げは、北満から命からがら逃げてきた日本人避難民を第一に、ついで町の住人を、そして私たちのような郊外にいる者が最後となる。町には、日本人がめつきり少なくなつた。あの闇市も、すっかり寂れてきた。

三月も半ば、トラック一台が我が家の前に横付けとなった。いよいよ我が家の引揚げの順番がきたのである。そのとき、銃を肩に掛けた黒服の八路軍の警官が二人、坂を登って我が家に向かつて来た。父が薬剤師であることを嗅ぎつけ、技術者として中国に残れというのである。

満州国では、知的職業はすべて日本人が占めていた。したがって、すべての日本人が一斉に引揚げれば、電気も水道も医療もストップしてしまい、中国社会が成り立たないというのである。

引揚げのトラックを目前に、父は苦渋の決断を下した。「お前一人帰れ！ お前には学校がある！」と力強く言った。実は、父は二十歳を前に単身渡満している。それは、進学を目前に父親を亡くし、二人の兄は東京の医学校にいて学資がかさむためである。父は満鉄病院に勤務しながら、そこから留学生として熊本薬専（現熊本大学薬学部）に入学、卒業後薬剤師となつて、ずっと満鉄病院に勤務していたのである。今度はちようど私

がその年齢に達し、やはり単身、全く逆のコースをたどろうとしている。運命のいたずらであるか？

引揚者の収容所は、大連埠頭近くの学校が当てられていた。体育館におびただしい荷物が検査のために並べられ、私は若者として荷物検査の使役に駆り出された。検査の済んだ荷物は、岸壁にドーナツ型に丸く積み上げる。その中で、引揚船が来るまで見張りをする。

大連の三月はまだ寒い。夜には小雪が舞ってきた。日本に帰れる。けれど、さして嬉しい気持ちがない。私が中国（満州）生まれの中国育ちであるためか？ それより、これまでの夢のような出来事の数々が、走馬灯のように去来する。残してきた家族の安否が気に掛かる。（母と姉は翌年、父は昭和二十八年無事帰国した）

幾日か過ぎて、引揚船が来た。船名を「興安丸」といった。貨物船を改造した船だ。船倉は、幾段にも蚕棚のようになっていた。話聞く奴隷船の

ようである。

旅順工大の学生が、やはり一人で引き揚げていて、私と良い話し相手になった。天下国家を、そして文学、哲学を論じた寮とは異なり、裸電球のもと、「日本は負けるべくして負けたんだ！」「至る所焦土と化した狭い日本に、一度に何百万と帰ってくる。果たして俺たちのスペースがあるのか？」「米国は、いわゆる三S政策で日本を骨抜きにしようとしている。その手に乗るな！」「およそ若者らしい希望に満ちた話はなかった。二人は、まだ見ぬ戦後の日本に怯えていたのである。

話に飽きて甲板に出ると、渤海の波は荒れていた。若い船員が、「リンゴの歌」を歌ってくれた。「リンゴ可愛いや、可愛いやリンゴ…」

興安丸は一路博多へ向かって急いでいた。といつても、途中幾度となく停船した。そのたびに、「敵潜水艦現る！」「この船にスパイがいる！」「ソ連軍から引き返せの命令がきた！」「まことしやかに、まだ戦争中のようなデマが飛び交った。

やつと対馬が見られるようになって、全員甲板に出て歓声を上げた。日本の島の緑は美しく、私は興奮した心を抑えきれなかった。

こうして船は博多に着いた。港には、あの略奪の現地人もソ連兵の姿もない。代わりに米兵が歩いている。

DDTを頭から何度も浴びた。すし詰め of 引揚列車に乗った。通路にゴザを敷いて座った。

深夜にあの広島を通過した。一瞬に二十数万の非戦闘員の尊い命を奪った原子爆弾に、無性に腹が立つ。「今後、世界の人々一人一人が正しい科学的生命感を持たなければ、再び原爆の悲劇が繰り返される」暗くて、車窓から広島島の惨状はよくは見られなかったが、犠牲者に黙祷を捧げた。この思い出は生涯忘れない。

こうして昭和二十二年四月二日、午前六時ごろ本籍地、岡山県笠岡駅へ降り立った。私は本家の玄関で元氣よく叫んだ。「信昭、ただいま帰りまし

打ち水がしてあった。やがて、米寿の祖母がこやかに迎えてくれた。「おや！ 信ちゃんか、お父さんたちは？」

九 引揚げ後の生活

本家に居候して半年、私は叔父を頼って上京した。叔父の店に住み込みで働き、夜は神田の夜学に通う生活をした。

昭和二十三年の三月も半ば過ぎ、夕刻突然に、大連一中の井上先輩、和田後輩がこの住み込みの店に現れた。私の居場所をどうして知ったのか、今も分からない。「おい！ どうしたんだ！ 復学をあきらめたんか？」「合格さえすれば、金は天下の回りもの、何とかなるさ……」「ここに、余った転入考査の願書がある。つべこべ言わずにすぐ書いて出せ！」私はハツとして、その説得に同意した。

こうして私は昭和二十三年四月、旧制新潟高校へ復学が叶った。授業料免除、奨学金、不足分はアルバイトで賄った。

全く彼等の友情が、その後の私の人生を決めたのであって、今も感謝の念を忘れない。

とはいえ、運命のいたずらは私につきまとう。せっかくの復学も、学制改革で、わずか一年で追いつけられなかった。すべての旧制高校が、新制大学に昇格したからである。

私は新潟大学理学部を卒業し、一時日本海区域産研究所で研究職を考えたこともあったが、年若い両親が気になって、両親の待つ本籍地岡山県で教職に就くことにした。

爾来ほぼ四十年、主に高校で教科は理科、生物を担当。この敗戦の体験から、生徒に、次代の人々に、生命の尊厳と平和の大切さを伝えることを生涯の仕事としてきた。

十 むすび

私の敗戦体験は、苦勞の連続であったとも言えるが、満蒙義勇軍など北満で遭遇された悲惨な苦勞には比べられない。危険なことも再三あったが、いずれも恐怖の段階で終わり、直接悲劇には

つながらなかった。

しかし、それでも異常の中の異常な体験である。そして、その影響は一時的ではなく、喜寿を迎えた今も、色濃く影を落としているように思う。

見方では、神が苦境克服の試練を与えてくれたのかもしれない。その意味からすれば、この体験は貴重なものに思えてくる。でも二度と経験したくないし、後世の人にも味わってほしくない。帰るところ、「生命の尊厳」「平和」こそがすべての人類の宝である。単純明快だが至難の課題でもある。